

「獨協大学」

## 新たな大学の顔 「学生センター」

城田 修司

● 獨協大学施設事業課

獨協大学は、文部大臣を務めた哲学者、天野貞祐先生により1964年に開学し、「大学は学問を通じての人間形成の場である」を建学理念として、昨年創立50周年を迎えた。先生は大学教育における全人的な人間性の開発を実現する手段として、授業だけでは得難い知識、経験、体力を涵養する学生の自主活動を重視し、学友会組織を「教育機構の一環」として学則に明記した。

その学友会活動を支えてきた「部室棟」は開学当初の建物であり、老朽化と旧耐震基準のため、耐震補強で使い続けるか新しく建て直すかが2009年10月に議論された。その後、2011年3月11日の「東日本大震災」の影響もあって、本学にとって必須の施設であること、また耐震補強は大規模工事に加えて高額な費用を要することから、新たなコンセプトに基づいた課外活動の場「学

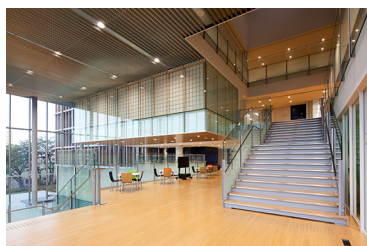
生センター」の建設を早めることになった。

キャンパスは創立50周年に向けた再編が進み、メインストリート  
の突き当たりであった  
旧部室棟は、図書館と  
教室を中心とした知的  
創造拠点「天野貞祐記  
念館」という巨大な建  
物の陰に隠れてしまっ  
ていた。新たな学生セ  
ンターは、最寄り駅から本学の中央部へのメイン動線の中

で、最初に出会う建物として位置づけられた。この重要な場所に学友会活動中心の施設を造ることに、さまざまな議論があった。しかし、前述したような天野先生の理念を具現化する新たな「大学の顔」として建設することが決定した。

学友会活動を教育の一環とする本学の考え方は、学生センターの隅々に表現されている。建設計画の具体的な





検討は、学生部長を中心として学生委員と学友会関係教職員をメンバーとする「学生センター検討部会」により進められた。基本コンセプトは①大学教育のシンボルの施設として学友会設置の意味を積極的に表現する施設 ②学友会以外の全学生も活動できる場所 ③利用形態の変化などに応じた柔軟な利用が可能 ④学生が教職員との距離を近く感じる施設 ⑤人と建物と自然の調和とした。このコンセプトのもと、設計事務所の選定と基本設計が進められた。また、2010年3月、大学の前を流れる伝右川の親水護岸計画が埼玉県の「水辺再生100プラン」に採択され、併せて進めることとなった。その後、実施設計および施工者を決定し、プロジェクトの体制が整った。前述のコンセプトを具現化するため、設計者、施工者および本学の三者による打ち合わせが連日のごとく行われた。

2012年9月、ガラスと人造石の縦ルーバーを組み合わせた地上6階建て、延床面積9556平方メートルの学生センターが竣工を迎えた。室内外ともガラスが多



用され、視認性が高く、学生の活動自体を直接見せることで学友会活動の魅力を伝え、また獨協大学で最初に出会う建物として、文字どおり大学の顔としてふさわしい建物となった。従前の部室棟の概念を打ち破り、低層階は全ての学生、教職員が集える場所となり、大学祭である「雄飛祭」や音楽団体のコンサートでは、床がせり上がって特設ステージに早変わりする機能も有する。加えて省エネ設備も積極的に採用し、可視化によって学生が省エネに自ら参加するような仕組みも導入した。これらの試みの全てが、2013年「グッドデザイン賞」の受賞につながったと考えている。

本学の教育理念を形にした建物は完成した。これを真の学生センターに育てるのは学生と教職員の力である。学友会活動を通じて学生が得る貴重な体験が、人間形成に大きな影響を与える。学生センターが、獨協大学の今後の50年に向けたさらなる発展につながる建物として、輝きを増すに違いない。

【立正大学】

## 熊谷キャンパス再開発

——分散から融合へ——

山崎 和海 ● 立正大学学長

キャンパスは、教育研究を通して大学の建学の精神を体現する場であり、経営資源である。本学は、特色ある2キャンパス（品川、熊谷）の資産を十二分に活用し、「学生数1万人」体制を維持しつつ、「人間・社会・地球に関する総合大学」への道筋づくりに努めている。

### 熊谷キャンパス全体コンセプト

熊谷キャンパスは武蔵丘陵森林公園の近隣に位置し、多彩な生態系を支える森に包まれ、その一部を内包した資産としての風景がある。この資産を生かしてキャンパスを再生することが、再開発の最重要テーマであった。既存キャンパスを再定義し、新校舎建設や広場の整備などを行う「アクティブゾーン」と、緑を保全する「キャンパスフォレスト」とを「水路」を境に意識的に分け、

2つのゾーンの相互補完関係を、対としてキャンパスの魅力を高めることによって、「『ひと』と『自然』と『建築』」が融合した風景に造り上げていくことをめざした。

### 新校舎コンセプト

新校舎（アカデミックキューブ、スポーツキューブ、メディアフォレスト）は教室・事務・厚生施設・情報メディアセンターを擁する「アクティブゾーン」を核とし、機能を集約することにより教学環境の向上を図った。この「密度感」が「『ひと』と『ひと』との密なるコミュニケーションを生み出し、整理して生まれた空間を広場として整備することにより、学生生活の潤いの場として、また社会に開かれた公園のようなキャンパスとなった。

### 環境コンセプト

熊谷市は、夏と冬の寒暖差の大きい気候の下にあるが、それでも快適に過ごせて、かつ地球環境に負担をかけない「エコ・キャンパス」づくりをめざした。中核施設の新校舎では、エコアイテムを、建物の基本性能の向上とエネルギーの有効利用の両観点から積極的に採用した。

自然エネルギー利用やBEMSにより、運用開始から1年間の一次エネルギー消費量は866MJ/m<sup>2</sup>・年となり、大学平均値(2007年度)よりも42%削減した。

### ランドスケープコンセプト(広場と水路と森)

大きく2つのリニアな広場を設定し、重点的に整備した。一つは、県道沿いに伸びるキャンパス・グリーンであり、40haの広大なキャンパスにふさわしく、大きくシンプルな緑の面として、キャンパスの表玄関の顔とした。ここに、主要な交通手段のバスロータリーを埋め込み、単に修景だけではない機能的空間とした。



キャンパスを流れる水路

もう一つの広場がキャンパスプラザであり、キャンパスを縦断する大きな軸として、最も主要なキャンパス生活の舞台となる。新しく造られた水路によって、対岸の緑が風景に大きく取り込まれるように計画した。このプレートの上に3つの特徴的な居場所を島状に浮かべ、対岸の深い森とは対照的に、明るい木陰に設置された小さな広場がさまざまなシーンで大学のアクティ

ビテイの核となることを意図した。

### 評価された点など

本計画は、「グッドデザイン賞」をはじめ「日本建築学会作品選奨」、「環境設備デザイン賞・環境デザイン部門最優秀賞」などの受賞や、建築専門誌、地上波テレビなどのメディアでも取り上げられた。

緑豊かな森や桜並木をバックに、学生の生き生きとした姿が映し出される豊かなキャンパスで、学生たちが授業を終えて木陰の広場で語らい、水路脇の階段に腰掛け、憩うなど、潤いと活気、そして自然と融和した人間味に満ちたキャンパスとなった。その後、子育て支援センターも新たに設置し、併せて民家や近隣の幼稚園、小学校、老人ホームなどから市民が自由に集える公園のような開放性も実現した。

加えて、2300本に及ぶ既存樹の調査および維持保全、並びに300本の新規植樹を行い、大学として初の「SEGES(社会・環境貢献緑地評価システム)認定サイト」ともなった。キャンパス整備後も更新認定が行われ、2015年現在もExcellent Stage 3を維持している。

「大正大学」

## 「隔て」を廃した修学環境の創出

平盛 聖樹 ● 大正大学事務局長

ここで紹介する3号館の建築は、2009年3月に策定した大正大学の中期経営計画である「中期マスタープラン」に基づくキャンパス総合整備の一環として実施されたものである。その設計にあたっては、大学側から設計事務所に対して以下の3つの要望を出した。

1つ目は、キャンパスの新たな顔としての役割である。3号館は、キャンパス風景の中で最も印象深い中央の銀杏並木に新たに整備される広場を介して建築される。また竣工後には、本学建学以来の伝統をもつ仏教学部、文学部歴史学科と、2010年に新設したばかりの表現学部の研究フロアが設けられる予定であることから、「建学の理念を表出し、未来へと伝承する建築空間」であることを求めた。

2つ目は、「大正大学の教育理念を体现する役割」であ

る。先に竣工した7号館は教室フロアをメインとし、「正規カリキュラムによる教育活動を充実させる中核施設」として建築された。これに対して3号館は、「自立性（自己研鑽力）と協調性（コミュニケーション力）を育む修学環境を実現させる中核施設」というコンセプトを掲げた。これは後述するように、本学における伝統的な自主学习スペースである閲覧室の利点を継承しつつ、学生個人の自立とグループ内コミュニケーションによる協調を生み出す環境づくりを志向したものである。

また、3号館が庚申塚通り（旧中山道）に面して建築され、東門から来学する人々のエントランスとして機能するほか、1階には地域連携・社会貢献活動の窓口となる鴨台プロジェクトセンターを配置し、単なる教育・研究棟ではなく、本学が強力で推し進めている地域連携活動を象徴する施設になる予定であることも重要な要素である。

3つ目が、「環境に対する低負荷型の施設とすること」である。外部からの熱負荷低減や熱ロスが少ない空調システムの導入、LED照明などの積極的な採用による省エネルギー型の建築計画を求めた。

このような経緯で設計・建築された地下1階/地上5階建の3号館は2012年3月に無事竣工し、2012年度グッドデザイン賞を受賞するに至ったのである。審査委員からは、外観についてチタン亜鉛合金の深い庇と潇洒なタイルが打ち込まれたPC板で構成され、モダンでありながら仏教系大学らしい品格を醸し出している点が評価された。一方、内部については、L字型の書架とガラスパーティションを組み合わせることによって連続的で開放的な空間を実現し、学生が互いに刺激し合いながら学ぶことが期待できる空間である点が評価された。



特に内部について述べると、本学では伝統的に閲覧室という自主学習スペースを学科ごとに設置してきた。ここには、机や椅子はもちろんのこと、パソコンや専門書籍などの資料を備えているほか、助手および副手と呼ばれる職員が常駐して学生の相談に対応するなどサポートを行っている。

また、教授室を同じフロアに設置して、学生と教員のコミュニケーションを促している。加えて、閲覧室は大学院生の研究スペースとしても使用されているので、大学院生と学部生の距離感が比較的近いことも本学の伝統的な特長といえる。

3号館の建築にあたっては、この閲覧室の機能を強化し、学科別のラーニングコモンズとして発展させることをめざした。伝統的な学問領域である仏教学科と歴史学科の閲覧室では、専門書籍の収納が課題だった。そこで、木製書架を間仕切りとして活用し、壁によるスペース分割のロス低減を図ると同時にアカデミックな空間演出へと繋げた。加えて、ガラスパーティションを利用して自主スペースとゼミスペースを緩やかに区切り、それぞれの利用者に「見る・見られる」の関係を発生させて、学習意欲を誘発する空間構成を意図したのである。

ガラスパーティションの採用については、学内でも賛否があった。しかしながら、「隔て」として空間の境となる壁を極力取り除き、視覚的連続性を確保することによって、そこに滞在する人間の交流を促進するというコンセプトは、今後の大学における修学環境のあり方を先進的に示したものであると考えている。